相模経済新聞　2020年10月10日号

宇宙生命哲学 ことはじめ

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤　俊洋

29

熱帯雨林のスコールを相模原で体験

令和2年9月初旬に発生した台風10号は、過去に例を見ないスーパー台風となって九州地方を襲った。過去に経験したことのない風力や、雨量が予想されるとの報道が繰り返された。台風から2000kmも離れた相模原でも、激しい集中豪雨が断続的に降った。

その時、私は、自宅の近くのサイエンスカフェ・コスモスのサンルームに居た。地響きを立てて、凄まじい量の雨が天から降ってきた。サンルームの屋根が破れんばかりの恐怖を感ずる雨量と轟音であった。10年ほど前に訪れた中米のコスタリカで経験したスコールが脳裏に蘇って来た。地球温暖化で、とうとう相模原でも熱帯雨林クラスのスコールに遭遇するようになったのか？

その時、私は、半ば衝動的にパンツ一枚になって庭の芝生の上に飛び出した。あっという間に全身がずぶ濡れになった。芝の上に横になると、地面は意外と暖かく、むせるような土や草の匂いが心地よかった。正に、先祖が野生動物であった頃の感覚が蘇った感じである。

スコールが収まったので、身体をタオルで拭いて、サンルームで休憩していると、前より凄いのが雷鳴を伴って襲来した。しかし何ということだろう。今度は、スコールのことを、全身で受け入れている。恐怖感は全くなく、何時でもスコールの中に立てる心の準備ができている。

台風10号の余波によるスコール後の虹とカラス（相模原市南区北里　伊藤佑子撮影）

何故、私がスコールの中に飛び出したのか、その訳を紹介しよう。10年ほど前に、長男が青年海外協力隊員として、コスタリカに赴任し、国立公園の生態調査を行っていた。月に2回ほど、コスタリカ便りを送ってきた中に、熱帯雨林のスコールの凄さが描写されていた。彼は、ガラス窓越しに文明人の傍観者としてこのスコールを見ている自分に気がつき、いわば自戒の念を持って、何時の日か、このスコールを全身に浴びながら野生動物と戯れてみたいというのだ。私は心から彼の境遇を羨ましく思った。私も彼地へ行ってみたいという、野生体験への憧れが、心の片隅に沸き起こったのだ。フロリダでの国際学会の帰途、息子の任地のコスタリカに寄った時、私は屋根の下でスコールを体験した。

私は、来年齢80になる。年寄りの冷や水と言われないように注意しながら、機会があれば、野生体験のレパートリーを増やしたいと考えている。